

坂口安吾文学における戦争観

— 同時代の中国作家との比較を視座に —

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D164007

氏 名 : 李 慧

本論文では、坂口安吾（1906-1955）の戦争観を分析した。第一章と第二章では、安吾の戦時下と戦後の文学活動を通じて安吾の戦争観を分析した。第三章では、日本による侵略を経験した作家が書いた抗日戦争小説を取り上げ、安吾の戦争観との比較を行った。具体的な内容は以下でまとめる。

序章では、安吾の生涯を紹介した後、安吾研究に関する先行研究をまとめ、中国戦争文学との比較を提起する理由を述べ、アジア太平洋戦争に対する日中両国の認識の違いを検討した。

第一章では、戦時下の代表作品『盗まれた手紙の話』（1940. 6）と『イノチガケ』（1940. 7）を中心に考察した。1937年7月の日中全面戦争の勃発を契機に、文化関連の諸施策における取り締まりが強化されていき、総動員体制の元で、「国民精神総動員運動」が始まった。1940年は、皇紀2600年を奉祝する事業を機に、それまでも厳しかった統制が新たな段階に入った。安吾の『盗まれた手紙の話』と『イノチガケ』は、ちょうどこの皇紀2600年の年に発表された。

『盗まれた手紙の話』論では、作品における精神病院という空間の意味と精神病院内に医師が不在であることの意味を分析したことで、1940年の時点で安吾が精神病をテーマとする作品を書いた意図を明らかにした。つまり、精神病院内部は、総動員体制下における統制されない場所、精神病院外部は統制された場所、を表象する。精神病医師が権威、差別の表象であり、作品中の精神病院において医師が不在という設定では、病院内の空間は差別のない世界の表象になりえた。ひいては、戦時下、皇国史観を理論とするアジア諸国蔑視による対外戦争をなくした。精神病院は戦争のないところであると、安吾は作品の中で作りたかったと思われる。このように、安吾は精神病を扱うことで、戦争を支えていた皇国史観を批判し、平和への期待を寄せた。

『イノチガケ』論では、切支丹たちに殉教を勧めた宣教師への批判を通じて、戦時下、皇国史観を大いに宣伝して兵士たちを死なせた体制側を皮肉った。また、新井白石の理性主義を称えることで、戦時下、皇国史観を中心とする精神主義を批判した。国策文学しか認められない戦時下では、安吾があえて歴史小説を描くこと自体、皇国史観への抵抗と言える。このように第一章では、安吾が戦時下、対外侵略戦争の理論としての皇国史観を中心に、批判したことについて論じていく。

第二章では、終戦から安吾の逝去（1955）までの代表作を分析した。この間で、朝鮮戦争を区分として分析した。第一節は、朝鮮戦争勃発前（1950）の代表作である『外套と青空』（1946. 7）、『女体』（1946. 9）、『不連続殺人事件』（1947. 8）を分析することで、その三作品が、終戦後、民主改革による世相を描いていることを明らかにする。『外套と青空』論では、時局に合わない女性を描いた。戦時下、国家総動員法が公布され、「家制度」も強調され、女性の道徳規範が厳しく制限された。しかし、『外套と青空』における女主人公のキミ子は、淫乱な生活をしていた。安吾があえてこのような人物を構想したのは、「家制度」を否定す

ることで、「家制度」を支柱とする天皇制を批判するためであると考えられる。また、戦後の民主改革による「家制度」の崩壊と接合しようとした。「女体」論では、生来病弱の夫谷村と健康な妻素子との対照を通じて、戦後のGHQの占領による男性のコンプレックスを描き出した。谷村の妻と彼が告白しようとする信子に、安吾は「淫蕩」という共通点を持たせることで、戦後の一連の民主改革による「解放」を表象しようとした。『不連続殺人事件』論では、遺産相続で引き起こされた犯罪事件と離婚・再婚の問題を通じて、新憲法による「家制度」の崩壊の影響を描きだした。歌川家の全滅は、新体制のもとで「家制度」の消滅を表象していると言える。天皇制国家の支柱としていた「家制度」の消滅は、終戦後GHQによる一連の民主化改革の結果を表象していた。安吾は、占領によって新たに出現した民衆の精神状態、社会現象などを通じて終戦直後の日本社会の世相を描きだした。

第二節では、朝鮮戦争勃発後の安吾の心境を描いた。1950年朝鮮戦争の勃発で、戦争の記憶が安吾の中で蘇り、再度の戦争への憂慮のため、安吾は自分なりに抵抗した。安吾にとって、5年前に終結した戦争は天皇制のもとで行ったものであり、再度の戦争の可能性を前に、安吾は象徴天皇制の持つ可能性について再び考えていた。『神サマを生んだ人々』論では、新興宗教である阿二羅教が戦後の新興宗教の問題を表象し、民衆の神への狂信ぶりを描き、天皇が再び政治に利用されることの恐怖さを訴えた。『狂人遺書』論は、秀吉による朝鮮出兵に表象された戦争への心配から、朝鮮戦争勃発後、戦争の残酷さ、終戦後の戦争遺留問題、再軍備への懸念を読者の前に再現した。この二節で構成された第三章は、民主改革、解放への支持ぶりと再軍備への批判を描くことで、安吾の戦争否定の態度を明らかにした。

第三章では、中国の戦争文学を取り上げ、安吾の戦争観と比較した。第一節では、満州事変を描く小説『カールチン草原』（1933.12）、『生死場』（1934.9）、『八月の村』（1934.10）を分析することで、この三作品の共通点が中国東北地方の下層階級の民族意識の覚醒であったことが判明した。これらの作品における、外からの侵略によって覚醒された国民の民族意識と、安吾文学において抵抗、批判された、戦争を支えた天皇制を支柱としたナショナリズムとは違う。第二節では、上海事変、南京事件をめぐる小説『南京慟哭』（1939）と『心防』（1940.5）を取り上げ、中国戦争作品における中国軍は勇敢で、最終の戦勝を固く確信していた、という結論を下した。これは安吾文学における軍人の厭戦情緒と明らかに違ったことが分かった。これら二節から、中国戦争文学にも安吾文学にも平和への期待が見られると推察される。